⇨ 12

素人義太夫一件より防長素人義太夫懸賞投票大番附　（河野家文書〈山口市〉583）

モノ ④

新聞社、集める（１）

《素人義太夫の番付表》

上の写真は明治33年（1900）5月から6月に実施された、「素人義太夫」＝座に属することなく義太夫をする人たちの人気投票の番付です。

企画は、当時山口町（現山口市）に本社を置いていた防長新聞社です。『防長新聞』紙上で投票を募り、結果を番付の形にして頒布しました。この企画を通して同社が集めたモノゴトを見てみましょう。

《懸賞投票の実施方法》

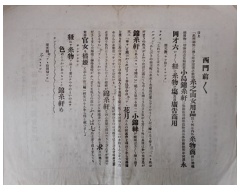
投票はどのようなルールでおこなわれたのでしょうか。『防長新聞』を追っていきましょう。まず、4月21日号社告に示された実施方式等は、おおよそ次のとおりです。

1) 紙上に掲載の用紙に対象者の住所・氏名・芸名を書いて投票
※新聞を買わないと投票不可
2) 男女の区別なし
3) 毎日集計し、翌日の紙上で報告
4) 上位者には賞品贈呈（1等は30円相当の見台〈本の台〉）
5) 投票は5月1日～6月30日
6) 結果は「県下素人義太夫大番附」として新聞付録の形で頒布
7) 山口町中河原の永楽座にて、賞品贈呈式と上位者等による義太夫大会を実施

同記事では、「過般来本紙愛読諸君より続々請求あるを以て」、今回の懸賞投票の実施に至ったとしています。

当時、山口県では義太夫が流行してました。また、『大阪毎日新聞』等、他地域でも同様の企画がおこなわれていました。その影響もあって、このような懸賞投票の実施を求める声が上がったのでしょう。

この投票方法は、当時大いに盛り上がりを見せていた『大阪毎日新聞』のものを踏襲しています（『大衆新聞と国民国家』）。ただ、この時点で、細かいことは決められていなかったようです。懸賞品提供



素人義太夫一件より
梅田花月披露会番組
（河野家文書
〈山口市〉583）

明治34年2月20日におこなわれた、懸賞投票上位者のひとり、梅田花月（11位）の披露会番組表です。

印刷費用は、賞品提供もした山口町の糸商、小島錦糸軒の寄付でした。

裏面には、義太夫の始まりの口上を模した同店の宣伝文句が刷られています。

者も同時期に募っています。同社では初めての試みゆえか、とりあえず始めてみた感じでしょうか。

日付	内容
5月5日	一度に500部以上購入したい人は2日前に申し込んでほしい
6月1日	5月31日から6月29日までの累計最多得票者に、翌日号10部を贈呈する
6月17日	一度に100枚以上を投票する場合、100枚ごとにまとめ、上に枚数を書いてほしい

▲表：追加された懸賞投票規則等

《懸賞投票の狂騒》

いざ投票が始まると、やはり想定外のことが続いたようで、細かいルールやイベントが追加されていきました。右の表に主なものをまとめています。

当初の規定には投票用紙の指定だけで、投票回数や投票方法等の制限はありませんでした。そのため、一度に沢山投票する人も多かったのでしょう。運営側もそれを止めるどころか、6月1日号を見る限り、むしろ積極的に推奨していた感さえします。

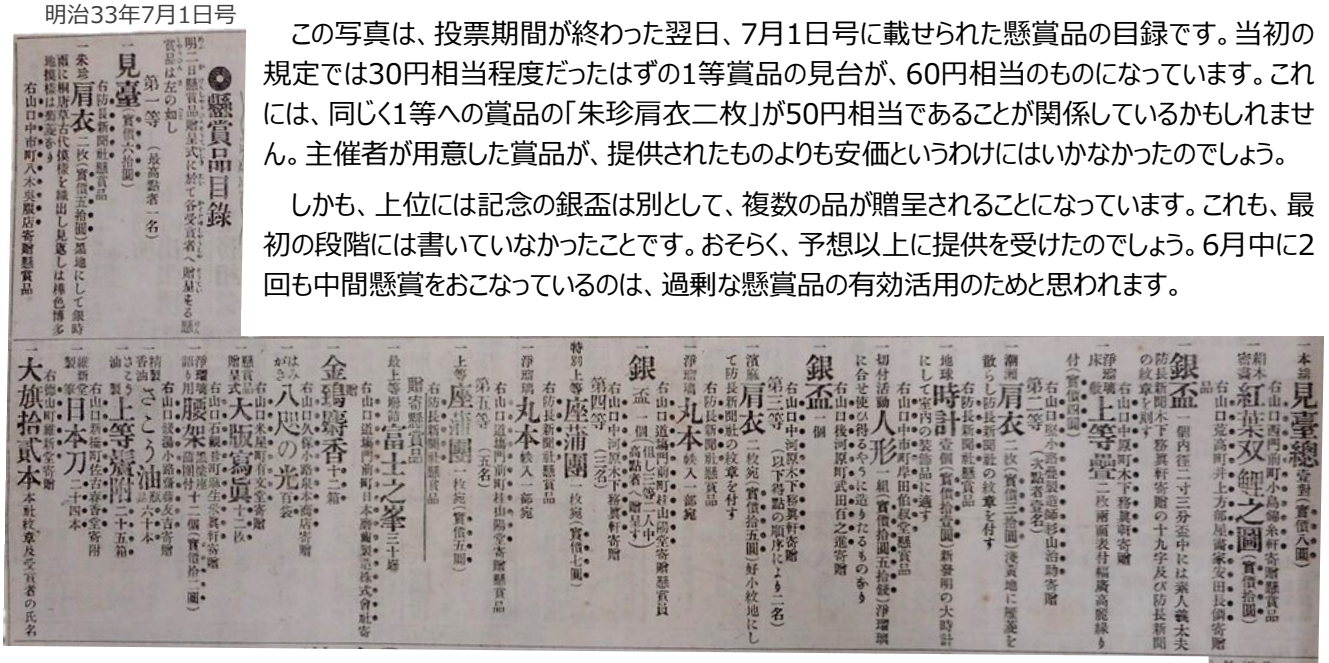
同17日号からは、一度に100枚単位で投票してくる人がいたことがわかります。郵送費も考えると、たしかにその方が経済的です。ちなみに、同紙の店頭価格は1部1銭5厘でした。

投票の〆切は6月30日午後6時必着でした。そのため、最後は同社に票が直接持ち込まれました。7月1日号の「昨日の〆切景況」によると、予め置いてあった2つの投票箱は正午頃には満杯になり、3つ目の箱を用意しました。人が途切れることもなく、大きな鞄から票を「掴み出す」という状況で、社員は「徹夜するも精査計算するの覚悟を以て」開票作業をおこなったそうです。最終的に有効票にして246,126票が投じられました（『防長新聞六十年史』）。

《懸賞品が集まり…すぎた…？》

反響の大きさにより、企画の趣旨に賛同する店も増え、懸賞品も続々と提供されました。懸賞品が提供される度、紙上でその旨が報告されました。当然ながら、提供した店にとってはよい宣伝になります。店としての面目もあったかもしれません。懸賞品の提供はそうやって膨れ上がったものと思われます。

▼『防長新聞』
明治33年7月1日号


懸賞品目録
第一等
見臺
朱珍肩衣二枚
日本刀二十四本
大旗拾貳本
紅葉双鯉之圖
銀盃
上等鬘
肩衣
時計
人形
銀盃
銀盃
丸本
丸本
富士之峯
金鶏磨香
八咫の光
大阪寫眞
腰架
座蒲團
座蒲團
上等鬘
日本刀
大旗拾貳本

この写真は、投票期間が終わった翌日、7月1日号に載せられた懸賞品の目録です。当初の規定では30円相当程度だったはずの1等賞品の見台が、60円相当のものになっています。これには、同じく1等への賞品の「朱珍肩衣二枚」が50円相当であることが関係しているかもしれません。主催者が用意した賞品が、提供されたものよりも安価というわけにはいかなかったのでしょう。

しかも、上位には記念の銀盃は別として、複数の品が贈呈されることになっています。これも、最初の段階には書いていなかったことです。おそらく、予想以上に提供を受けたのでしょう。6月中に2回も中間懸賞をおこなっているのは、過剰な懸賞品の有効活用のためと思われます。

《耳目を集める》

写真の目録では、品名の後に提供者が書かれています。これを見ると、懸賞品の多くが山口町の商店より提供されていることがわかります。また、同紙広告欄には、「山口県下素人義太夫懸賞投票募集中即ち五月一日ヨリ六月三十日迄防長新聞大売捌仕候」（6月15日号）など、取扱店の広告も載りました。

9月30日・10月1日に開催された上位者による大会も、各日1,600人余が来場し、盛況だったようです（『防長新聞六十年史』）。「防長素人義太夫懸賞投票」は、義太夫愛好者のみならず、（主に山口町の）義太夫関連業種の各商店、新聞取扱店等、様々な層の関心を集めることに成功したといえそうです。